

「技術伝承」 団塊引退一技を受け継ぐ男たち

八木澤 徹著

(日刊工業新聞編集委員兼論説委員)

我が国の工業高校に学ぶ生徒の数は、昭和40年の624,105人をピークとして減少に転じ、現在はピーク時の半数にも満たない30万人を切る状況へと推移している。工業高校生の数がピークだったころの卒業生が、いわゆる団塊の世代と呼ばれる年代にあたり、我が国の産業界を支えてきた。当時の方々は、技術的にも技能的にも優れた人が多く、「メイドインジャパン」の品質を保証してきた人々でもある。

本書は、ものづくり立国ニッポンの現状を「戦後日本の高度成長と、バブル崩壊後の『ものづくりニッポン』復活を支えてきた『技能集団』がゴッソリ抜け落ちる危機感が、ものづくり現場に広がっている」と分析し、2年に一度開催される「技能五輪国際大会」を糧に、技能伝承への取組を推進している企業や人々を取り上げ、今後の方向性を示した本である。

本書の構成は①2007年問題と技能五輪 ②ものづくり現場の今 ③「和」の力 ④ヘルシンキでの熱き闘い ⑤人を「創る」 ⑥技能五輪の歴史 ⑦職業紹介 ⑧対談 ⑨資料「2007年ユニバーサル技能五輪国際大会」となっている。

データが駆使されているという内容ではないが、必要に応じた分析が成されており、技能伝承の課題とその解決に向けた方向性を知る上で

の入門書として推奨する。特に、今年11月に静岡県沼津市を中心として開催される「ユニバーサル技能五輪国際大会」は、技能五輪国際大会と、身障者のための技能五輪「アビリンピック」が、世界で初めて同時開催となった記念すべき大会でもあり、観戦に当たっては過去の経緯などが参考になると思われる。

技術・技能に目を向ける人々が増加し、その必要性も声高に叫ばれている昨今ではあるが、絶対数の不足は将来に不安感を抱かせる原因となっている。本書によれば、レオナルドダビンチなどが活躍したルネッサンス時代のころは、およそ60年の間に4割近い人口減があり、当時はその最低の時期であった。しかし、そのような時代だからこそ歴史に冠たる文化が育ったとも言える。「人口が減少すると人々は生産性の高い分野に進出する。このため1人あたりの所得は向上し、文化が生まれる素地が出来る」などという堺屋太一氏の分析も味がある。また同時期は、日本では室町時代に位置しているが、この時期に書院造りや茶の湯、歌舞伎など日本文化の原型ができ、大工、左官、漆器、陶芸など、我が国のものづくりの原点となる技術・技能の礎ができた時期でもあったとの事である。

入職する人が少なければ、その分を補完できる能力を有する人材を育てれば課題は一気に解決するが、そのためには工業高校に進路を目指す中学生を増やす必要がある。若い時代の感動は人生をも変えるエネルギーを秘めている。願わくは本書に目を通し、技能五輪へ足を運んだ中学生の中から、明日のものづくりを担う人材が育つことを願っている。

(中央職業能力開発協会 (JAVADA), 279頁, 1600円)

(毛利昭)